なごや文化情報

2019
3・4
March / April

No.385

NAGOYA
Cultural
Information

特集／2018年　1年をふりかえって
平成30年度名古屋市芸術賞・名古屋市民芸術祭賞

公益財団法人 名古屋市文化振興事業団

2019
3・4
March / April

Contents

名古屋市民文芸祭　受賞作品 …… 2
2018年　1年をふりかえって …… 3
平成30年度　名古屋市芸術賞 …… 9
平成30年度　名古屋市民芸術祭賞 …… 10
おしらせ …… 12

「なごや文化情報」編集委員
上野 茂（ナゴヤ劇場ジャーナル編集長）
森本悟郎（表現研究･批評）
山本直子（編集･出版 有限会社ゆいぽおと代表）
吉田明子（人形劇団むすび座制作部長）
米田真理（朝日大学経営学部教授）
渡邉 康（椙山女学園大学教育学部准教授）

表紙

作品
garden
（2014年／acrylic on cotton canvas／90.9×90.9㎝／石井昭氏　蔵）

目に見えたり見えなかったり、自然界の中から浮かび上がる生命力、生命美を可能な限り純化した色と形で描いていきたいと思っています。そして、そこに豊かに溢れ出る幸福感が存在したならば、一層、作品として頼もしいのですが。

久米 亮子（くめ　りょうこ）

1994年　個展・ギャラリー山口（96･98･00･02･04･06･08）
1997年　個展・名古屋画廊（98･04･06･08･11･14･17）
1997年　VOCA'97（上野の森美術館）
2012年　個展・ギャルリー東京ユマニテ（12･14･16･18）

1996年～　ハートリー絵画教室代表
http : //ryoko-km.com

「2017年　名古屋市民文芸祭」
（第六八回名古屋短詩型文学祭）小・中学生の部
詩の部　受賞作品より
※受賞時の学校・学年で掲載しています。

◆市教育委員会賞◆

名古屋市立萩山中学校1年
河野 莉子

ぼくはアリ

ぼくはアリ
小さい体で働くよ
でも
なんせ小さなアリだから
いろんなものに
つぶされそうになるんだ
よ

だからぼく
家から出るのが怖いんだ

兄弟たちから
せかされて
ビクビクしながら
外に出た

あ～した天気にな・あ・
れ　と

子どものくつが飛んでき
た
ぼくはフギャーと
逃げまどい
やっとの思いで
家の中

でもぼくはやっぱりアリ
だから
勇気を出して
顔を出す

そしたらなぜか
静かだな
ぜんぜん人が
見当たらない
そうか！みんなは教室に
三時間目の始まりだ!!

そうそうぼくの
アリの巣は
運動場の真ん中の
ポツンと広がる草むらの
緑の草の下なんだ
ゆかいで楽しい家なんだ

ぼくはアリ
授業が終わらないうちに
セカセカセカと働くよ

ぼくはアリ
見つけた時は踏まないで
お願いだからそっとして

2018 1年をふりかえって

洋　舞　長谷 義隆(中日新聞放送芸能部編集委員)

新国立劇場バレエ団がオーストラリア・バレエ団と共同制作した新作「不思議の国のアリス」は日本バレエ界の2018年話題作の一つだったが、くしくも名古屋出身のプリンシパル二人が日豪で主演したことはご存知だろうか。新国立劇場の米沢唯と、オーストラリア・バレエ団の近藤亜香である。近藤は同作でバレエ界のアカデミー賞ともいわれる「ブノワ賞」にノミネートされ、注目を浴びた。

留学中のジュニアでは、ベルリン国立バレエ学校の後藤匡聡が、第４回バルティック国際バレエコンペティションのプレプロフェッショナル部門で優勝し、岐阜と名古屋の里帰り公演で着実な成長ぶりを披露した。

地元に目を転じると、愛知県芸術劇場など主要ホールが耐震改修で閉じた器不足の影響は大きかった。とりわけバレエは主要団体が定期公演を休止したり、中編・小品集に振り替えたりして、古典全幕ものが影をひそめた。例年、年末には上演ラッシュとなる「くるみ割り人形」が、越智インターナショナルバレエの１公演のみに激減したように、全体に小粒、低調に推移した。

残念ながら、当地のバレエ団は劇場不足を逆手にとって、思い切って東京公演に打って出たり、バレエの殻を破る実験的な試みをしたり、という企画性が乏しいようだ。

しかし、ダンサーは踊る場を求めてやまない。受け皿となったのは、所属団体の枠を越えてダンサーが結集した舞台である。日本バレエ協会中部支部の島崎徹作品「Absence of Story」は、ブラームスの名曲「雨の歌」の堅固な音楽構築の内に息づく熱い心をくみ取って、吉村菜奈子をセンターに女性ダンサー11人の群舞が優美さと激情、協調と葛藤、さまざまな感情を濃密に変奏した。

石原弘恵振付・主演の「窺知(きち)～ワタシの在処～」

三代舞踊団「はやぶさ２」の大気圏突入シーン
撮影：スタッフ・テス　根本浩太郎

同時上演の「パキータ」よりグラン・パを踊った西田悠乃には舞台をパッと明るくさせる華があった。次代を担う逸材として、今後が期待される。

テアトル・ド・バレエカンパニー「オリンピア」は、スポーツの動きの要素をダンス化。同団常任振付家である井口裕之の名古屋最後の作品で、佐々智恵子バレエ団「エーデルワイス」、岡田純奈バレエ団「フローラの目覚め」とともに、芸術の秋を彩る佳作だった。

ダンスでは「清洲ＭＤＡ（モダンダンスアカデミー）」を率いる石原弘恵に進境。第20回記念東京なかの国際ダンスコンペティションの初優勝作を含む「窺知(きち)～ワタシの在処～」は、喪失感、崩壊感からの自己再生という心象風景と内面のドラマを描いて、現代の生きづらさを照射した。異種競演に果敢に取り組む倉知可英のKAYAKU NIGHT 第3回公演「マイ・パーフェクト・ワールド」は映像、身体表現、音楽が相乗したスペクタクルショーを創出し、鮮烈な印象を残した。

ジャズダンスの三代舞踊団は、「ロシア・クラスノヤルスク日本文化祭」に招待公演。芸術監督 坂本久美子、振付家・主演ダンサー 三代真史のコンビは、壮大なテーマに挑み、地球の生成、霊長類の進化を舞踊化した「青道 Mワールド―光と影」、さらに生命誕生の謎に迫る小惑星探査機はやぶさ2の軌跡（乗倉奈津美主演）をダンス化し、飽くなき挑戦を印象づけた。

演　劇　小島 祐未子(編集者・ライター)

2018年、最も興奮した舞台は名城大学の演劇サークル・劇団獅子のOBが旗揚げした劇団ハイエナの『イ』だった。同作は一見デタラメなイメージのコラージュが奇妙な夢を見ている感覚で楽しいのだが、徐々に曖昧で不確かな私たちの〈生〉の実感と通じて切実さを増す。社会や労働、哲学、宇宙、神…、いろんな要素が散りばめられ、時に辛さや痛みも伴うが、不思議と重くもなければウェットにもならない。〈生〉と〈演劇〉を重ね合わせて見せたことも非常に効果的で、しかもそこに悲観も楽観もない。ただ「始まって、終わる」だけと言わんばかりのアッケラカンとした空気があり、それでいて温かい気持ちになる。台本は創立メンバーの荻原翔平、主宰の佐藤優樹、演出も手掛けるオノウチハルカが3人で共作しており、特にオノウチの才能がまばゆく愛しい。今は感性だけで創作している節もあるが、これでテクニックや理論を手に入れたらどうなるのか末恐ろしい。

劇団ハイエナ『イ』

劇作家・演出家の斜田章大、音楽家のいちろーを中心とする廃墟文藝部の『ミナソコ』も見応えがあった。男性作家と歳の離れた妹の謎めいた関係が、家庭教師としてやってきた女子大学生との交流の中で明らかになっていく物語なのだが、映像で言葉を視覚化する趣向が功を奏した。小説家が主要人物なので、台詞だけでなく文字でも作品を鑑賞する行為は今回の劇世界と相性が良い。さらに劇中に作家が書く小説と同様、映像の文字も登場人物たちを飲み込でいくような仕掛けになっていて、何とも言えない恐怖や気持ち悪さに見舞われる。アンデルセンの童話『人魚姫』もモチーフに親子や家族、あるいは愛や性といった普遍のテーマを、救いのないダークファンタジーにして描き切った斜田の筆致が観る者を圧倒した。

廃墟文藝部『ミナソコ』

刈馬演劇設計社の刈馬カオスは児童劇『風を見たかい？』で新境地を見せた。ジョイントフェスティバル愛知の一環で、劇団うりんこの俳優や演劇組織KIMYOの元山未奈美らと宮沢賢治『風の又三郎』を下敷きに創作。刈馬にとって児童劇も賢治を扱うのも初めてだったが、異文化交流を現代らしく国際的にとらえ、子どもだけでなく大人の視点も巧みに取り入れた劇は優しく胸に染み入るものがあった。

劇団ジャブジャブサーキットのはせひろいちは、名古屋市芸術創造センター演劇アカデミー修了公演『科学する探偵〜名古屋から乱歩を支えた作家・小酒井不木の生涯〜』を書き下ろした後、劇団の旧作『ランチタイムセミナー〜検証1997年・ペルー日本大使公邸人質事件〜』を岐阜市内で再演。同じ岐阜を拠点とする劇団から多数の客演を迎え、地元の活性化にも貢献した。そして秋の新作『ビシバシと 叩いて渡る イシバシ君』では、ほんわかした劇団員たちの味と、はせ一流の謎解き、この世の者ではない存在が絡み、真骨頂を発揮した。

毛色の違うところでは、エレガント濱田50歳記念公演が衝撃的だった。現在はショー形式の舞台を手掛ける濱田だが、この節目に『山劇・HOTMILKタッパーズ〜踊れ！下半身〜』を初披露。浪曲や落語、講談などを我流でミックスした「山劇」なる一人語りの新様式を編み出し、自身の代表作をリメイクしたのだ。アングラ演劇、小劇場演劇、様々なプロデュース公演での活躍を経て、濱田が行き着いた自由過ぎる境地には脱帽するしかなかった。

なお、4月には老舗劇場の御園座が新装開場。こけら落としの大歌舞伎に続き、スーパー歌舞伎Ⅱ『ワンピース』や滝沢歌舞伎といった人気演目が名古屋初登場を果たし、当地を沸かせた。

洋　楽　早川 立大(音楽ジャーナリスト)

耐震などの工事のためにしばらく休館していた愛知県芸術劇場コンサートホールと電気文化会館ザ・コンサートホールが秋になって相次いで開館した。反面、愛知県芸術劇場大ホールが4月から、三井住友海上しらかわホールも秋口から長期間の工事休館で、演奏家や演奏団体は会場確保に苦労し、毎年の定期的なコンサート開催を見送ったケースもあったようだ。

［声楽］オペラでは名古屋市芸術創造センターでの公演が増えた。芸創コラボオペラ『藤戸』（3月3＆4日）、エウロ・リリカ

の『エフゲニー・オネーギン』（9月29&30日）、名古屋市民芸術祭2018主催事業のロッシーニ、オペラ『ランスへの旅』（10月27&28日）、名古屋演奏家ソサエティーの創作オペラ『忠臣蔵』（12月22&23日）などだ。中では『ランスへの旅』が高い水準の出来栄え。名古屋市とフランスのランス市との姉妹都市提携を記念した上演は田尾下哲の演出のもと、地元の声楽家たちが超絶技巧に挑んで精進の成果を披露した。

芸術創造センター以外では、愛知県芸術劇場プロデュースのオペラ『バスティアンとバスティエンヌ』（愛知県芸術劇場小ホール、11月16&17日）が楽しめた。12歳の時にモーツァルトが書きあげたこのドイツ語オペラは登場人物が3人であり、小ホール向き。ダブルキャストの声楽陣、角田鋼亮指揮の愛知室内オーケストラ、太田麻衣子の演出が一体となって、舞台と客席の間に和やかな雰囲気を醸し出した。ほかに名古屋二期会の定期オペラ公演『ちゃんちき』（日本特殊陶業市民会館フォレストホール、12月12&13日）、ともにコンサート形式による、名古屋テアトロ管弦楽団&合唱団のプッチーニ『トゥーランドット』（東海市芸術劇場大ホール、7月1日）と愛知祝祭管弦楽団が挑んでいるワグナーの『ニーベルングの指環』4部作の3作目、楽劇『ジークフリート』（御園座、9月2日）をあげておこう。

［器楽］オーケストラでは、名古屋フィルハーモニー交響楽団が小泉和裕音楽監督のもとで、年11回の定期演奏会を中心に着実な成果を上げた。新たに「平日午後のオーケストラ」シリーズを起ち上げ、第1回はムソルグスキーの「展覧会の絵」やラヴェルの「ボレロ」などの名曲で高齢のファン層を惹きつけた（日本特殊陶業市民会館フォレストホール、2月28日）。セントラル愛知交響楽団は2019年春から常任指揮者に就任する角田鋼亮が第161回定期演奏会でスウェーデンの作曲家アッテルベリの交響曲第4番などを新鮮に聴かせた（しらかわホール、4月20日）。偶然にも、名フィルもアッテルベリの交響曲第6番を取り上げている（日本特殊陶業市民会館フォレストホール、2月16&17日）。

『バスティアンとバスティエンヌ』
愛知県芸術劇場小ホール©羽鳥直志

『石橋直子ヴィオラ・リサイタル』
電気文化会館 ザ・コンサートホール

室内楽ではブラームスの作品に秀演が多かった。中でも愛知県立芸術大学弦楽器専任教員「愛・知・芸術のもり弦楽五重奏団」を中心とした3年に及ぶブラームス室内楽全曲演奏プロジェクトの最終第10回（しらかわホール、3月1日）、室内楽集団アンディアーモの室内楽作品全曲ツィクルス第7回（ザ・コンサートホール、9月2日）、ヴァイオリン・ソナタ全3曲の植村太郎（宗次ホール、10月2日）に指を屈する。またバッハの無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ全6曲にシューマンによるピアノ伴奏付きの形で挑んだ桐山建志と小倉貴久子のデュオ（同、10月20日）、没後100年のドビュッシーの世界を「喜びの島」や前奏曲集第2巻など、圧巻の演奏で表現したピアノの鈴村真貴子（ザ・コンサートホール、11月10日）、珍しいヴィオラの名品たちを高度な技巧により誠実に描き出した石橋直子（同、11月19日）も強い印象を残した。

能　楽　竹尾 邦太郎（能楽評論家）

はや名古屋能楽堂開館20周年を記念するという。

1月、吉例『正月特別公演』は伝統的に「翁」、注連を張った厳粛な舞台は自ずと身仕舞を正させる雰囲気。シテはお馴染の久田勘鷗、悠揚たる翁舞に長年の自信の充実ぶり。

1月13日『豊田市能楽堂・新春能』は喜多流十四世宗家・六平太能心（1874－1971）に師事した長田 驍「西行桜」。長年、東海地方の流儀を支え活躍し、今回を舞ドメとする由、相応しい選曲に老翁の面目。清閑を愛で、俗界の喧噪を厭うシテ西行法師は鳥羽上皇に仕えた元・北面の武士 佐藤義清、若くして無常を感じ出家。「花見んと群れつつ人の来るのみぞ可惜（あたら）桜の咎にはありける」の一首を小耳に挟み、「桜の咎とは」と、硬骨ぶりをみせる。

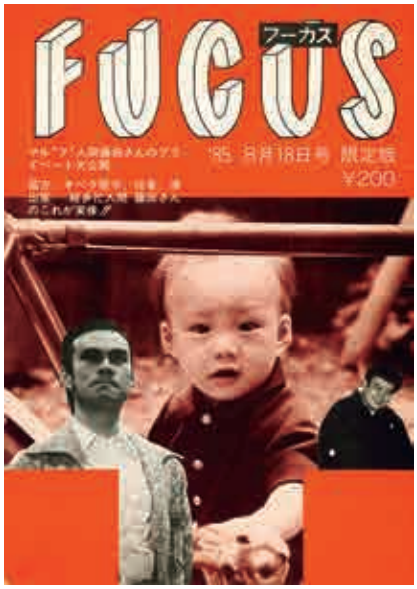
「翁」名古屋能楽堂
シテ久田勘鷗　撮影・杉浦賢次

3月18日『宝生会・定式能第62期第2回』「隅田川」人攫いに拐かされた吾子を求め京から東へ下る傷心の母（シテ辰巳満次郎）、隅田川の船中で船頭（ワキ飯冨雅介）から問わず語りに聞かされる語（かたり）の、まさか、を思わせる淡々とした声音に憐みの味わい、シテとワキ両者の微妙な心情どっぷり絡み合い切ない。

吾子の死が現実となる念仏の段、一般に子方はキリ近く切戸から出して塚に入れるようだが、子方・和久凜太郎は狭い塚の中、よく辛抱して初めから入って居り、久しぶりに見たが、舞台が引き締まり、起居進退立派だった。

7月8日『第19回・御洒落名匠狂言会』「釣狐」狐（シテ今枝郁雄）披キ。和泉流は大習（大蔵流は極重習、何れにせよ修行の最深奥の曲）、一族を釣り獲る悪さの張本人は他ならぬ伯蔵主が伯父といって憚らない甥の猟師（アド佐藤友彦）。伯蔵主に成り代り、シテは恐る恐る狐の執心の怖さを説き伏せる裡に、おっかなびっくりの気持ちも落ち着き、是が非でも説得せんとの意気込みへと、口跡に力強さも。アドも然る者、未だ疑念は晴れずに罠を仕掛け、待ち受ければ挙動不審の狐。重涎の餌を宛がわれれば居ても立っても居られず、苦しまぎれの呻吟は一方ならぬ遅疑逡巡。狐の形態模写がいっそいじらしい位に見事、上々の被キだった。

8月28日、笛方・藤田流十一世宗家・六郎兵衛昭彦急逝、享年64歳。能楽界は、誰しもスケールの大きな、掛け替えの無い人材を失った思いだろう。昭和60年、当時評判であった写真週刊誌「フォーカス」を真似、同じ版形（薄っぺらだったが）を用いたFUCUSにて生後30年の軌跡を世に問う。奥付には発行所・歌舞式会社六郎兵衛社、〒999不思議県能楽市笛吹区藤田町11番地、編集・発行人 穴子好彦、電話編集部110番、などと稚気愛すべき勝手放題。その後も話柄に「小包は郵便局、能は小鼓」と落語の枕のような話芸に「能」を大いに和まし喧伝すること一方ならず、その礎あってこその、ゆったりした芸の余裕綽綽であっただろう。それにしても早逝は無念。謹んで御冥福をお祈りする。



FUCUS

邦舞・邦楽 北島 徹也（CBCテレビ 事業部専任局次長）

4月に白鸚・幸四郎襲名公演で御園座が新開場、早速ここを会場としての『71回 名古屋をどり』（9/6～10 御園座）は今年も「藤娘」など素人参加枠を設け、新作など千雅の挑戦は続き、「むらぎも杖」では右近と菊次郎が至芸であった。西川流は、師籍50年の真乃女が『第十五回記念 しのじょ会華心』（4/22 市民会館ビレッジ）で他流の出演も得て「東海道五十三次」、家元らと「八幡鐘」、長寿の會を永年主宰した長寿が1月に逝去、『第47回 長寿乃會』（5/26 市民会館ビレッジ）で長秀は思いを込めて「河」を踊った。鯉之亟・鯉娘は『12回 ふたり華』（9/23 市民会館ビレッジ）で素踊り「紅葉狩」を見せた。また、名妓連も『河文座』（5/16、17 料亭河文）で地方も演奏、「金の鯱」はお家芸だが、古典舞踊に加えて俗謡も披露した。

花柳流は『第12回 梅奈香会』（4/15 市民会館ビレッジ）で梅奈香が「お祭り」、「釣女」、「助六」、子供たちも出演させて日頃の指導を披露した。衛宗は『遊の会』（11/18 昭和文化小劇場）を立ち上げ「河」を、寿江育世も「序の舞」を出した。

『第55回 秋栄会 第25回 長唄おやこ会』
今池ガスホール

『第29回 赤堀加鶴繪舞踊会』（6/10 市民会館ビレッジ）は「隅田の流れ」と創作「謎」と対照的な2題で、「謎」は多面的で不思議な世界に観客を迷い込ませた。

内田流は『創立65周年記念公演』（9/19、20 市民会館ビレッジ）で全員での「口上」に始まり、有美は「松の名所」、寿子は「花姿」を踊り、二人で共演した「龍虎」は迫力があった。弟子たちの「瓢箪」、るり美知の「酒や酒なすな酒の物語」も印象深い。

五條園美は『第25回記念 五條園美リサイタル』（10/13 名古屋能楽堂）で弟子たちとの「あたま山」をメインに「吼滅」、「猿まわし」を始め作品集として公演、「荒れ鼠」（園青、恵奈）、「高尾ざんげ」（美佳園）、「連枷の音」（園八王）など。「羽衣」を踊った園小美は大学在学中ながらリサイタル（6/30 千種文化小劇場）を開催し、創作舞踊「森羅」を発表した。大学に日本舞踊部を創部、部員たちも当日の会場運営を手伝って、新しい形の“習い”を実践している。

稲垣流『68回 豊美会』（9/24 松楓閣）で、友紀子は「朝顔市」、舞比と依都で「春の調べ」を踊った。ともに素踊りながら佳品。

さまざまな伝統文化を紹介する『芸術鑑賞会』（9/17 アートピアホール）を主宰する瑞鳳流は雅子の「梅の春」と澄依の「女太夫」を。『リサイタル二人会』初回（11/18 北文化小劇場）は、澄依が「初時雨」と都名所が良い風情の「静と知盛」、雅子は「黒髪」と「新曲浦島」を出した。

芝流は創流50周年で『芝流50周年記念・第40回 芝乃会』（10/28 御園座）、千桜は「雪月花」、新内流し、さまざまな楽曲での「千洲と桜舞う」が圧巻。

長唄は、杵屋三太郎が『第25回 長唄杵三会・第２回 杵屋三太郎リサイタル』（９/23 今池ガスホール）で「狂獅子」、明治150年にちなみ作曲された「ももいそとせ」で初代三太郎の時代をしのんだ。杵屋六秋・六春の『第55回 秋栄会・第25回 長唄おやこ会』（11/10 今池ガスホール）は共に回数を重ね、今回は幻をテーマに六春は「二人椀久」を、六秋は「時雨西行」を演奏した。海外でも活躍する杵屋勝千華と勝桃は『桃華の会』（６/２、３ 昭和文化小劇場）で一日目を舞踊と器楽も入れ解説付きの公演とした。『第52回 見音代会』（３/18 熱田文化小劇場）を見音代とともに主宰する見佳は『長唄三味線演奏会』（11/15 名古屋能楽堂）で杵屋彌四郎らとともに「呼應」、「勧進帳」など新旧の曲を弾き名古屋市民芸術祭賞を得た。杵屋彌十郎『柳蛙会』（９/24 今池ガスホール）では地元の長唄演奏家も出演、「雨の四季」では真乃女が立方。

名古屋邦楽協会も『名古屋小唄大会』（４/15 今池ガスホール）と、御園座での『名古屋邦楽大会』（11/25）が７部門500人余りの出演を得て創立70周年記念の大会となった。

都山流尺八峰山会は『竹の響き VOL.5 管管共響』（10/19 名古屋能楽堂）で、東西の管楽器とのコラボレーションを聴かせ、名古屋市民芸術祭特別賞（企画賞）を受賞した。糸竹会は創立90周年で『1021回 三曲演奏会』（５/27 北文化小劇場）で伝統の音色である。

舞踊劇『納屋橋物語』名古屋市芸術創造センター
©杉原一馬

掉尾を飾ったのは、［芸創コラボ］舞踊劇『納屋橋物語』（12/16 名古屋市芸術創造センター）である。花柳朱実が企画・主演、伊豫田静弘の脚本・演出で、流派を超えた日舞、創作長唄、新劇、児童合唱などのほか、舞台、照明、音響がみごとなコラボの舞台を創り上げた。

美　術　田中 由紀子（美術批評／ライター）

2018年10月８日、名古屋ボストン美術館が閉館した。同館は、アメリカのボストン美術館の姉妹館として1999年４月に開館。名古屋に居ながらボストン美術館のコレクションを鑑賞できることから、初年度は約60万人の来場者を動員したものの、次年度以降、計画を大きく下回る来場者数と低金利による財政難から、2018年度以降はボストン美術館と作品借用契約を更新しないことが2016年には決まった。最後の展覧会となる『ハピネス～明日の幸せを求めて』は、さまざまな幸せの在り方が表現された作品をとおして、人間の幸福感について考えるというもの。「ボストン美術館所蔵の優れたコレクションを恒常的にわが国に紹介する」（※同館ウェブサイトより）という使命は継続できなかったものの、ハート形の台紙に書かれた来場者からのメッセージで館内の通路や窓が埋め尽くされたさまからは、この場所で美術と向かい合うことが多くの人々の幸福感につながっていたことが窺えた。名古屋の主要美術館の一つであった同館の閉館が、今後のこの地域の文化芸術の振興にどう影響するか、同館の活動はあらためて総括されるべきだろう。

名古屋ボストン美術館の閉館を惜しむメッセージカード

ART NEXT３「不透明なメディウムが透明になる時一次世代のアーティストたちー」イクタケイコの展示風景

ほかでは、愛知県美術館が2017年11月から2019年３月末まで、豊田市美術館が2018年７月から2019年５月末まで改修工事による休館のため、美術館の展覧会が少なく、活況を欠いた感があったが、名古屋市美術館の開館30周年記念『モネ それからの100年』と『至高の印象派展 ビュールレ・コレクション』が好評を博した。『モネ それからの100年』は、モネが現代美術に与えた影響の検証をとおして、モネ芸術の広がりを伝えると共に、現代の作品をモネとの関連から捉え直す機会となった。豊田市美術館『ビルディング・ロマンスー現代譚を紡ぐー』は、現代美術から切り離されてきた物語を再び紡ごうとするもので、関連イベント『悪魔のしるし「搬入プロジェクト ＃22豊田市美術館」』では、いつもは裏方である運送会社の美術輸送スタッフが「主役」となり、参加者と

共に搬入に困難をきたしそうなサイズと形状の造形物を展示室に運び入れる様子は、まさに演劇的だった。

ギャラリーの活動では、名古屋を中心とした15の現代美術ギャラリーが、ART NEXT 3『不透明なメディウムが透明になる時ー次世代のアーティストたちー』で集結。電気文化会館での開催は2017年を初回に今回が3回目だが、各ギャラリーが所属作家をそれぞれに紹介していた前回までとは異なり、一つの展覧会としてこの地域の現代美術の動向を展観し、今後の展開を予感させるものとなっていた。同展は「あいちトリエンナーレ2019」に寄せて企画されたものだが、2013年と2016年にトリエンナーレの開催地となった岡崎市では、閉幕後も市民が継続的に現代美術に触れる機会の創出を目指して、参加者が展覧会作りに携わる『キュレーション実践講座』が2017年から実施されている。今年度は成果発表として加藤マンヤ、田口友里衣、小川愛を参加者作家とする現代アート企画展『あふれる、こらえる、なめてみる？』が開催されるなど、トリエンナーレがまいた種が確実に芽吹き始めている。

最後に、「トリエンナーレスクール」がレクチャーに少人数制のディスカッションを加えたラーニングという方向性をとるようになったことにも触れておきたい。ディスカッションをとおして共に考え、学び合うことにより、参加者のボトムアップが図られ、彼らによるミュージアムコミュニティが形成されることに期待したい。

文　学　清水 良典（文芸評論家・愛知淑徳大学教授）

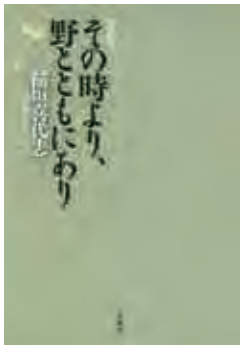
昨年急逝した地元名古屋の風媒社の創業者、稲垣喜代志の遺稿集『その時より、野とともにあれ』が刊行された（風媒社）。野の民衆とともに立ち、権力の傲慢さに敢然と立ち向かい続けた出版界の風雲児の血気が、収められたどの文章からも若い果実のようにほとばしり出る。とりわけ未完に終わったものの、稲垣にも勝る稀代の風雲児を描いた『怪人・唐九郎伝説』が、収められた評伝『唐九郎風雲録』と併せて、余人には書けない独自のポルトレになっている。11月4日には東区の文化のみち二葉館で、トークイベント「出版人。稲垣喜代志の〝志〟」が催された。また、稲垣も所属し昨年終刊した『遊民』に連載されていた山下智恵子の力作長編『サダと二人の女』も風媒社から刊行された。

気鋭の時代小説作家として、つとに注目を集めていた奥山景布子が、江戸落語の始祖を描いた『たらふくつるてん』（中央公論新社）や、高須松平家ゆかりの四兄弟を描いた『葵の残葉』（文藝春秋）の成果で高い評価を集め、愛知県芸術文化選奨新人賞と新田次郎賞を相次いで受賞したことは慶賀に堪えない。今後ますますの全国的な活躍が期待できる。現代女子のネット言葉で書かれた吉川トリコの『マリー・アントワネットの日記』Ⅰ・Ⅱ（新潮文庫nex）も、歴史上の異国の人物を活き活きと親近感豊かに蘇らせた快作として人気を博した。

18年度の中部ペンクラブ賞は、弥栄菫（やえすみれ）の『誰かが誰かのＳ』（『峠』70号）だった。人と人がどこか上下の権力関係にならざるを得ない現代のストレスフルな世相を、ユルいおかしみとたくましさを帯びた文章で描いた快作である。

他に、税務署の不当な徴税と戦う脚本家を描いた山田直堯『袋小路の人びと』、山田順二による近代フランスの伝説的ダンサー・興行主の評伝『ロイ・フラー：元祖モダン・ダンサーの波乱の生涯』（ともに風媒社）、野性的な反骨のエネルギーを宿した日方ヒロコの作品集『ヒッチハイク』（インパクト出版会）などが出版物の成果といえる。

雑誌の小説では、ジル・ド・レの伝説で知られる青髭城を舞台にした西澤しのぶ『榛（はしばみ）の王』（「文芸中部」108号）、スマホ世代の男女の行きつく茫漠とした場所を描いた、長月州『できるだけ奥に避難してください』（「Ｒ＆Ｗ」24号）、性同一性障害に悩む若者が熊野の地で生き方を見出す、藤原伸久『空あり』（「文宴」130号）などが記憶に残る。評論では、シベリア抑留から生還した石原吉郎の秘められたキリスト教徒としての葛藤を描いた、加藤万里『背離としての信仰ー石原吉郎とキリスト教ー』（「象」91号）が画期的な論考だった。



遺稿集
『その時より、野とともにあり』
著：稲垣喜代志　出版：風媒社

『葵の残葉』著：奥山景布子
出版：文藝春秋

平成30年度 名古屋市芸術賞

平成30年度名古屋市芸術賞は、次の方が受賞されました。「芸術特賞」は、長年にわたり優れた芸術創造活動を行い、かつ、近年における活動が顕著で、名古屋市の芸術文化の振興に大きな功績のあった方に、「芸術奨励賞」は、継続的に活発な芸術創造活動を行い、かつ、将来の活躍が期待され、今後とも名古屋市の芸術文化の振興に寄与することを期待できる方に贈られるものです。

芸術特賞

伊藤（いとう） 敬（けい） 演劇【演出】

昭和33(1958)年、早稲田大学第一政治経済学部（現政治経済学部）を卒業し、東海テレビ放送に入社。ドキュメンタリー番組『わたしはひとみ』をプロデュースし、国際赤十字映画祭のテレビ部門で金賞を受賞するなど、番組プロデューサーとして活躍した。

その後培われた演出力を活かし、演劇の制作・演出に取り組みはじめ、平成5(1993)年、仮面をつけた本格的なギリシア劇として、東海テレビ放送開局35周年記念『オイディプース王』を制作・演出。以後、平成11(1999)年『アンティゴネー』、平成13(2001)年『アウリスのイーピゲネイア』、平成16(2004)年『アガメムノーン』を制作・演出。ギリシア劇に学究的姿勢で臨み、合計4本の作品を舞台化した。

平成25(2013)年より名古屋市東文化小劇場で「戦争を語り継ぐ演劇公演」を始めた。自身も戦争を体験した一人として語り継ぐ義務があるという思いからこれまで、『テミスの剣』、『てぃんさぐの花』、『噂』、『約束』、『沈香』と連続的に上演。自身も脚本に携わり、証言者の言葉はできるだけそのままセリフに落とし込み、戦時下で人が人らしく生きた真実を表現している。地元演劇人を結集させた本作品は、地元制作演劇の通例を大きく超える累計1万人以上を動員。“生涯現役”を掲げており、同シリーズで今後も上演を予定している。情熱あふれる演出力で当地域の芸術文化の振興に果たしてきたその功績は多大である。

芸術奨励賞

渡部（わたなべ） 純子（じゅんこ） 音楽【声楽】

平成8(1996)年に国立音楽大学声楽科を卒業後、東京二期会オペラ研修所、新国立劇場オペラ研修所等で研鑽を積む。平成13(2001)年に渡米し、平成16(2004)年にマンハッタン音楽院にて修士号を取得。平成17年(2005)年にアーティスト・インターナショナルコンクールにおいて特別賞を受賞し、カーネギーホール内ヴァイル・リサイタルホールにて受賞リサイタルを開催。平成19(2007)年にコネチカット・オペラ劇場にて『蝶々夫人』でデビュー後、平成21(2009)年にリンカーンセンターにて『トゥーランドット』リュー役にて出演。平成24(2012)年に帰国するまでニューヨークで活動を行う。

帰国後は名古屋を中心に活躍し、平成25(2013)年、帰国記念リサイタルにて第9回名古屋音楽ペンクラブ賞を受賞。名古屋二期会に所属し、二期会オペラ公演『宗春』『蝶々夫人』『ちゃんちき』他、コンサートなどに出演している。また市民の「第九」コンサート2012においてソロで歌い、これまでソプラノリサイタルを2回開催する。平成28(2016)年に愛知県芸術文化選奨新人賞受賞、平成29(2017)年には名古屋市民芸術祭特別賞を受賞するなど高い評価を受けており、近年は名古屋音楽大学及び愛知県立芸術大学で講師として後進の育成にもあたり、今後もさらなる活躍が期待される。

加藤（かとう） おりは 舞踊【スペイン舞踊】

幼少よりバレエ、新体操を学ぶ。平成6(1994)年よりスペイン舞踊をはじめ、渡西し研鑽を積む。平成16(2004)年には、愛知芸術文化センター主催ダンスオペラ及びあいちダンス・フェスティバル、ダンスクロニクルにおいて『悪魔の物語』に出演。同年ソロ公演『Soy』を行う。平成17(2005)年には、愛知万博において、『ビヨンボ』に主演。平成21(2009)年より渡印し、スペイン舞踊の源流となった北インド古典舞踊カタックを学ぶ。また、国内では養護施設の子供たちに向けたアートプログラム「KIP」を平成22(2010)年より開催し、様々なアーティストと子供たちとの作品を公演している。平成24(2012)年、「Dance Grand Prix Europe in ITALY」において 2位を受賞。 同年、受賞作品『KAN』を上賀茂神社にて公演を行う。平成25(2013)年、中国総領事館の招待を受け、「中国ー北東アジア博覧会」に出演。平成26(2014)年より、韓国にて「Busan International Dance Festival」「BIDAM」など数多くの舞台に出演し、現地でのワークショップを開催する。 また、能とのコラボレーション作品『葵の上～AOI NO UE～』を日本、韓国で公演。平成30(2018)年にはオランダで開催された「Art Brut Biennale」に出演し、現地の小中学校でワークショップを開催するなど、多くの地域で活躍している。

これまでフラメンコを軸に様々なアーティストとセッションし、独自の表現を展開。現代舞踊の作品も手がけるなど幅広く活動しており、今後もさらなる活躍が期待される。

竹市（たけいち） 学（まなぶ） 伝統芸能【能管】

昭和58(1983)年、11歳で笛方・藤田流11世宗家・藤田六郎兵衛に入門し、笛の手ほどきを受ける。昭和59(1984)年に初舞台を踏む。高校卒業後に上京し、国立能楽堂三役育成事業(第3期)に参加した。研修所では、基礎研修で仕舞や囃子など一通り受けた上で、専門研修に進む。研修中の平成7(1995)年に西安能楽公演に出演する。平成8(1996)年国立能楽堂研修生を卒業し、同年『猩々乱』『獅子』『翁』を披く。その後も『道成寺』『恋之音取』を披くなど、今日までに笛方の秘曲を数多く披く。舞台以外でも幅広く活躍し、映画『梟の城』で笛を担当、ＮＨＫドラマ『蝶々さん』での能笛指導を行った。

また海外での活躍も目覚ましく、平成9(1997)年にヴェネチア能楽公演に、平成12(2000)年にはニューヨーク・メトロポリタン美術館能楽公演に、平成14(2002)年にはニューヨーク9.11追悼公演に出演した。さらに平成27(2015)年にはギリシャ・エピダウロスフェスティバルでの新作能『ネキア』に、平成28(2016)年にはニューヨーク・カーネギーホールで行われた市川海老蔵『GRAND JAPAN THEATER』に、平成30(2018)年にはフランス・パリを中心に行われている文化芸術イベント「ジャポニスム2018」において野村萬斎・杉本博司『Sanbaso,danse divine』に出演した。

シテ方の名家・大家の信頼篤く、全国区で活動する笛方の俊英として、今後さらなる活躍が期待される。

名古屋市民芸術祭2018　名古屋市民芸術祭賞

名古屋市文化振興事業団では、平成30年10月から11月の２か月間にわたり、全24事業（主催事業５、参加公演19）に及ぶ「名古屋市民芸術祭2018」を開催しました。その参加公演19公演（音楽９、演劇４、舞踊３、伝統芸能３）の中から、特に優秀な公演に「名古屋市民芸術祭賞」を、また、特に表彰に値する公演に対して「名古屋市民芸術祭特別賞」を授与しました。

名古屋市民芸術祭賞（２公演）

10月19日（金）
電気文化会館　ザ･コンサートホール

音楽部門　相可佐代子メゾソプラノリサイタル

フランスの歌曲とオペレッタによる趣向をこらしたプログラムで、20世紀の作曲家の作品など、あまり知られていない曲を楽しんで聴くことができる、エンターテインメントに満ちたリサイタルだった。伝えたいという強い想いが、確かな実力と卓越した表現力によってしっかりと届く満足度の高い公演となり、聴衆を魅了した。

プロフィール

- 97年　名古屋音楽大学大学院音楽研究科声楽専攻修士課程修了。
- 99年　オペラ「蝶々夫人」スズキ役でオペラデビュー。
- 01年　パリ市立シャトレ劇場研修生として渡仏（２年間劇場にて研修）。
- 04年　Rencontre Musicales 音楽祭（フランス）にてソロリサイタル開催。
- 05年　パリ・エコールノルマル音楽院高等演奏家課程修了。
- 06年　オペラ「ナクソス島のアリアドネ」作曲家役で出演。
- 09年　オペラ「カルメン」タイトルロールで出演。「市民の第九」アルトソリストで出演。
- 10年　相可佐代子メゾソプラノリサイタル開催（名古屋市民芸術祭賞受賞）。
- 11年　オペラ「ヘンゼルとグレーテル」魔女役で出演。
- 14年　相可佐代子メゾソプラノリサイタル開催（名古屋音楽ペンクラブ賞受賞）。
- 15年　茂木大輔のオーケストラコンサート No.11 ソリストで出演。
- 17年　ヴェルディ「レクイエム」メゾソプラノソリストで出演。

11月15日（木）
名古屋能楽堂

伝統芸能部門　杵屋見佳　長唄三味線演奏会 ～My Mother's Long Wish～

一音一音を大切にする演奏で、大曲「勧進帳」をはじめ、全曲を弾き切った実力は十分に評価に値し、古典と現代曲を組み合わせた選曲や、異なるジャンルとのコラボレーションといった意欲的な演出で聴衆を惹きつけた。地道な努力が花開いた、質の高い迫力のある演奏会であった。

プロフィール

- 96年　東京藝術大学長唄三味線専攻卒業。
- 00年　ＮＨＫ・ＦＭ「邦楽のひととき」出演。韓国大田市「日･韓伝統音楽交流会」出演。
- 11年　椙山女学園高等学校･中学校　土曜講座講師。
- 16年　椙山女学園大学文化情報学部ゲストスピーカー。金城学院大学非常勤講師。
- 18年　平成30年度土曜学習プログラム講師（名古屋市教育委員会生涯学習課）。大丸松坂屋友の会　松坂屋カトレア文化教室講師。

名古屋市民芸術祭特別賞（５公演）

撮影：駒田のぶゆき

10月７日（日）
電気文化会館
ザ･コンサートホール

音楽部門（舞台芸術賞）　松波千津子ソプラノリサイタル vol.7 in ルチア

照明や衣裳などを効果的に用いた演出で、限られた空間と時間を有効に使い、臨場感溢れる凝縮された「ルチア」を表現した。コロラトゥーラを駆使したアリアも見事に歌いきり見ごたえ聴きごたえのある充実した内容。演奏会形式を超えた完成度の高い舞台だった。

プロフィール

- 83年　愛知県立芸術大学大学院音楽研究科修士課程を首席修了。合唱のためのオペラ「さようならかぐや姫」かぐや姫役でデビュー。
- 87年　文化庁推薦国内芸術家研修員修了。岐阜県芸術文化活動特別奨励賞受賞。オペラ「祝い歌が流れる夜に」しま役で出演。
- 93年　オペラ「春琴抄」春琴役で出演。オペラ「蝶々夫人」蝶々夫人役で出演。
- 96年　オペラ「夕鶴」（指揮／團伊玖磨）つう役で出演。
- 97年　日米親善公演（アメリカ・カーネギーホール）オペラ「唐人お吉」お吉役で出演。
- 99年　岐阜県芸術文化奨励賞受賞。オペラ「天守物語」富姫役で出演。
- 01年　名古屋市芸術奨励賞受賞。
- 08年　NCO 第２回公演オペラ「道化師」ネッダ役で出演。
- 09年　NCO 第４回公演オペラ「魔笛」夜の女王役で出演。
- 13年　オペラ「不思議の国のアリス」公爵夫人役で出演。
- 15年　オペラ「あしたの瞳」シンディー・フェルダー役で出演。
- 19年　名古屋芸術大学大学院音楽研究科・芸術学部教授。名古屋オペラ協会副委員長。岐阜県県民ふれあい会館評価員。

11月22日(木)～24日(土)
＜5回公演＞
昭和文化小劇場

演劇部門（チャレンジ賞）
Office KAN 第四回プロデュース公演 戦国ミュージカル「覇王の子」

舞台美術や衣裳などが充実したエンターテインメント性の高い時代劇ミュージカルの上演にチャレンジしたことは、評価に値する。若い世代を多数起用するとともに、音楽・演劇・舞踊などの様々なジャンルの実演家で構成する大きなカンパニーをまとめ上げ、満席の観客を惹きつけた舞台は、地元発ミュージカルの発展を期待させるものであった。

プロフィール

14年　小澤寛を代表にOffice KAN立ち上げ。第一回プロデュース公演「授業」上演。
15年　武将隊ユニット「レジェンド家康公天下泰平組」結成。
16年　第二回プロデュース公演「陽なたの干しぶどう」上演。国民文化祭あいち開会式にレジェンド家康公天下泰平組が戸田恵子氏と共にナビゲーターを務める。
17年　第三回プロデュース公演「日本一不味い店」上演。

代表の小澤寛は、戦争を語り継ぐ演劇公演の15年「てぃんさぐの花」、17年「噂」「約束」、18年「沈香」の上演実行委員。16年に名古屋演劇ペンクラブ賞受賞。名古屋芸術大学非常勤講師。

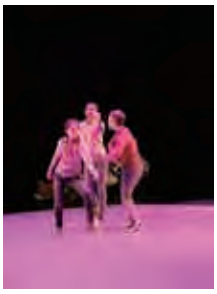
10月10日(水)
愛知県芸術劇場小ホール

舞踊部門（熱演賞）
清洲ＭＤＡ30周年記念 石原弘恵 舞踊公演「窺知～ワタシの在処～」

主演ダンサーの研ぎ澄まされた身体表現を核に、激しくもキレのいい緻密なアンサンブルが共振し、内面のドラマを表現した。音楽、映像、照明などの相乗効果により舞台に迫力を与える構成で、鍛え上げられたダンサーたちの熱演が光る舞台となった。

プロフィール

04～08年　ＮＹにてコンテンポラリー、ジャズファンク、HIPHOPを学ぶ。
07年　第9回なかの国際ダンスコンペティション2位。Passion du ballet kyoto 2007コンペティションコンテンポラリー1位。
09年　バレエ・コンクールin横浜コンテンポラリー部門3位。
14年　第2回座間全国舞踊コンクール1位、優秀指導者賞　他。
15年　至学館大学大学院に入学し、健康科学研究科健康科学専攻修士課程を修了。
17年　第5回座間全国舞踊コンクール1位、優秀指導者賞、審査員長特別賞　他。
18年　第20回なかの国際ダンスコンペティション第1位、審査員特別賞　他。
現在、清洲ＭＤＡ講師、至学館高校ダンス部コーチ、至学館大学非常勤講師、至学館大学創作ダンス部外部講師、日本福祉大学非常勤講師、現代舞踊協会中部支部会員、洋舞家協議会会員。



11月28日(水)
千種文化小劇場

舞踊部門（チャレンジ賞）
倉知可英 KAYAKU NIGHT Vol. 3「マイ・パーフェクト・ワールド」

舞踊家だけでなく音楽、映像、照明などのクリエイターたちが互いに触発、啓発しながら、自己の殻を破る導火線に火をつけ、内在する力をバクハツさせて、異種競演の実をあげた。実験的な試みを一つの舞台にまとめあげるチャレンジ精神が評価される舞台であった。

プロフィール

96年　初リサイタル・倉知可英DANCE YARD開催。
98年　アンデパンダンエクセレント賞受賞。愛知県新進芸術家海外留学補助事業の助成を受け、フランス・グルノーブル国立振付センターにて2年間研修。
00年　グルノーブル国立振付センター「グループ・エミール・デュボワ」(ジャン＝クロード・ガロッタ主宰)のダンサーとして在籍し、フランス国内や20カ国以上の国にて踊る。
06年　日本へ帰国し、名古屋を拠点に活動スタート。
08年　KAYAKU NIGHT vol. 1開催。
10年　あいちトリエンナーレ2010祝祭ウィーク「光の記憶」開催。
13年　あいちトリエンナーレ2013祝祭ウィーク「光の記憶　第二章」開催。
14年　名古屋市芸術奨励賞受賞。
15年　名古屋市民芸術祭2014特別賞「スピリット賞」受賞。
17年　倉知可英・加藤おりはジョイントリサイタル開催。

10月19日(金)名古屋能楽堂

伝統芸能部門（企画賞）
都山流尺八峰山会 竹の響き VOL. 5「管管共響」～洋々たる奏楽の音～

笙、フルート、ファゴットによる和洋の、管楽器にこだわったコラボレーションで、「共響」の可能性を追求した、尺八リサイタルの枠を超えた企画力の光る演奏会であった。様々な楽器が奏でられる工夫を凝らした内容で、親しみやすく楽しい世界を創ろうとした試みが評価できる。

プロフィール

84年　「第1回　峰山会尺八演奏会」開催。
99年　「第7回　峰山会尺八演奏会」(日本芸術文化振興会助成公演)開催。
04年　「第8回　峰山会尺八演奏会」開催。
06年　「錦の秋」コンサート開催(移動公演)。
07年　「竹の響き」～伝統から創造～開催。
08年　「レイクサイド」コンサート開催(移動公演)。
09年　「竹の響き VOL. 2」～尺八協奏曲～開催。
10年　「お城のまち」コンサート開催(移動公演)。
13年　「お城と鵜飼のまち」コンサート開催(移動公演)。
「竹の響き VOL. 3」～現代邦楽五番立～開催。
15年　「竹の響き VOL. 4」～流祖中尾都山の軌跡～開催。
「あゆちがた・健康の森」コンサート開催(移動公演)。
17年　「三河の風、波たつ響き」コンサート開催(移動公演)。

授賞式

名古屋市芸術賞と名古屋市民芸術祭賞の合同授賞式が下記のように開催されました。

日時　平成31年2月1日(金)15:00
会場　名古屋市役所本庁舎5階　正庁

名古屋市芸術賞

名古屋市民芸術祭賞

文化事業への寄附金を活用し 創造性と都市の魅力を高める 文化力によるまちづくりを 目指しています。

支援と育成
芸術や文化活動の支援と育成をしています。

参加と交流
みなさまが参加し交流できる事業を展開しています。

芸術の鑑賞
文化や芸術のご紹介や鑑賞をしています。

情報の発信
さまざまな芸術や文化の情報を発信しています。

ご寄附の際は、インターネットを利用したクレジット決済(クレジット寄附)もご利用いただけます。

ご寄附のお問い合わせ | ご寄附は、いつでも受け付けております。

名古屋市文化基金 Eメールアドレス
a3172@kankobunkakoryu.city.nagoya.lg.jp

名古屋市観光文化交流局
文化歴史まちづくり部文化振興室
TEL: 052-972-3172

公益財団法人
名古屋市文化振興事業団
TEL: 052-249-9390

税の控除について | この寄附金は、ふるさと納税の対象です。

ふるさと納税 FURUSATO

○個人の場合 | 確定申告によって、以下の金額を所得税及び個人住民税から控除することができます。

所得税(所得控除)
寄付金額 又は 総所得の40% のいずれか低い金額 ⊖ 2千円 ⊜ 寄付金控除額

個人住民税(税額控除)
寄付金額 又は 総所得の30% のいずれか低い金額 ⊖ 2千円 ⊗10% ⊕ 特別控除額 ⊜ 寄付金税額控除額

＊特例控除額＝(寄附金額－2千円)×(100%－10%(基本分)－所得税率)

※所得税率は復興特別所得税を含めた率 [注意]特例控除額は 所得割額の2割を限度とします。

○法人の場合 | 寄附された金額を法人税法(第37条第3項第1号)の規定により損金算入することができます。

「ふるさと納税ワンストップ特例制度」をご利用いただけます。

ふるさと納税をした翌年に確定申告を行うことが必要です。ただし平成27年4月1日以降は、寄附時に「ふるさと納税ワンストップ特例制度」の申請をしていただくことで、確定申告をしなくても控除を受けられるようになりました。(特例制度は、給与所得者等の方で、確定申告の必要がない方、寄附先の都道府県及び市区町村が5団体以下の方に適用されます)
※確定申告には、この寄附金の領収書が必要となりますので、大切に保管してください

名古屋市 ←①寄附の申し出→ 寄附者
名古屋市 →②払込書を送付→ 寄附者
名古屋市 ←③寄附→ 寄附者
名古屋市 ←④特例申請書の提出→ 寄附者
名古屋市 →⑤申告特例通知書の送付→ お住まいの市区町村
寄附者 ←⑥翌年度の住民税の減額← お住まいの市区町村

詳しくは、市公式ウェブサイト内 名古屋市文化基金 検索

名古屋市

わたしたちの会社ではISO14001を取得、
印刷にかかわる制作から配送まで、トータルで環境に
やさしいシステムを構築、環境負荷低減印刷を目指します。

中日高速オフセット印刷株式会社
〒462-0847 名古屋市北区金城四丁目3番19号
TEL (052)914-1711 FAX (052)914-7913
http://www.c-offset.co.jp

舞台VTR映像専科
ステージの感動を格調高い映像で追求します。

ビデオソフトの企画制作
有限会社 エーワン.ビデオ.システム
TEL (052)896-2256 FAX (052)896-4100

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

ナゴヤ劇場ジャーナル
◎年間6,480円で毎月お手元にお届けいたします。
◎毎月24,000部発行 ※東海地方の演劇・舞踊・音楽公演・ホール、DM等にて配布

公演・発表会の受付から制作業務全般まで、何でもご用命下さい
MANAGEMENT PRO 株式会社マネージメント・プロ
〒461-0004 愛知県名古屋市東区葵2-11-22 アバンテージ葵305
TEL (052) 508-5095 FAX (052) 508-5097
URL http://www.mane-pro.com
業務内容 ①舞台の企画・制作マネージメント ②イベントの企画制作 ③芸術団体のコンサルティング ④舞台・イベントの運営

デザイン・印刷／中日高速オフセット印刷株式会社

なごや文化情報は、古紙パルプを含む再生紙を使用しています。

平成31年2月25日発行(隔月1回25日発行)通巻385号 編集発行／公益財団法人 名古屋市文化振興事業団 〒460-0008 名古屋市中区栄三丁目18番1号 TEL(052)249-9385 FAX(052)249-9386 HP http://www.bunka758.or.jp/